



◎茨城県北相馬郡北総実修学校として開校。2003年度に総合学科となった。2年生以降、アカデミック系列、プラクティカル系列、インフォメーション系列の3系列に分かれる。ボランティア活動に力を入れ、生徒有志が東日本大震災の被災地の他、フィリピンやカンボジアなどでも支援活動に取り組んでいる。

設立

1922(大正11)年

形態

全日制/総合学科/共学

生徒数

1学年約240人

2015年度進路実績(現役のみ)

国公立大は、北見工業大、茨城大、福島大、青森公立大などに7人が合格。私立大は、上智大、中央大、東京理科大、法政大、立教大などに延べ193人が合格。短大、専門学校進学102人。就職は、キャン、オカモトなどに22人。公務員2人。

住所

〒302-0013
茨城県取手市台宿2-4-1

電話

0297-72-1348

Web Site

<http://www.toride1-h.ibk.ed.jp>

茨城県立
取手第一高校

生徒の実態把握

生徒の志望実現に向け、 客観データを使った 学習・進路指導を徹底

変革のステップ

背景

◎総合学科になって以来、進学意識の高い生徒が入学してくるようになった。生徒の変化に応じ、教師が指導を変える必要があった

STEP 1

実践

◎学習指導、進路指導の客観的な指標として、全学年でスタディーサポートを導入。また、学習習慣の定着に1年生から力を入れるようになった

STEP 2

成果

◎生徒一人ひとりに対して学習への意識付けが図られた結果、主体的に学びに向かう生徒が増えた

STEP 3

生徒の変化に応じた
指導の転換が必要だった

茨城県立取手第一高校は2003年度に単位の総合学科となり、近年では国公立大への現役合格者を毎年送り出すようになった。入学生の志望進路も、普通科の他に食品工業科や商業科などを設置していた頃は就職希望が大半だったが、徐々に進学希望が増えていった。

ただ、生徒の進学意識の高まりに、教師が対応し切れていない面があった。例えば、学習指導では、以前と同じように成績下位層の基礎学力定着には力を入れるものの、上位層の関心を引き上げ、学力を更に伸ばす指導には課題があった。そのため、入学時点での学力は高かったにもかかわらず、いつの間にか成績が下がってしまう生徒がいた。進路指導でも、一般入試で大学を受験させる指導体制が整っておらず、大学進学を望む生徒には推薦・AO入試を勧める傾向があったと、進路指導主事の加藤和男先生は振り返る。

「生徒の学力や学習習慣、志望大などに関するデータが不足しており、先生方の経験や感覚に頼った進路指導が行われていました。もちろん、進路指導に慣れた先生ばかりではありませんから、可能性を十分に検討しないまま、進路を決める生徒が出てしまっていたのです。2年生以降は、授業や定期考査の内

容が各系列で大きく異なるため、指導方針を学年団で統一することも難しい状況でした」

生徒の変化をこまめに見取ろうと スタディーサポートを導入

同校では、他校から異動してきた教師を中心に、学習や進路指導の客観的指標を求める声が強まり、13年度に改革に向けて大きく舵を切った。その最初の取り組みが、ベネッセのスタディーサポートの導入だ。1・2年生が年2回、



川村始子 かむらら・ともこ
茨城県立取手第一高校教頭
教職歴30年。同校に赴任して2年目。「プロの教師として先生方が生徒の可能性を引き出せるように、組織や環境を整えたい」



加藤和男 かとう・かずお
茨城県立取手第一高校
教職歴30年。同校に赴任して6年目。進路指導主事。「感謝の気持ちを忘れず、志を高く持ち、日々努力していきたい」



岩崎卓士 いわさき・たくじ
茨城県立取手第一高校
教職歴26年。同校に赴任して4年目。3学年主任。「今出来る最高のことに取り組み、次につなげていきたい」



松尾拓 まつお・たく
茨城県立取手第一高校
教職歴12年。同校に赴任して4年目。3学年担任。「生徒の立場からの目線を失わず、生徒に誠実であれ」

3年生が年1回、いずれも国語、数学、英語の3教科で行い始めた。当時1学年主任で、現3学年主任の岩崎卓士先生は、他学年の成績も参照できるように、全学年で一斉に導入したと話す。

「上の学年の生徒の成績を確認することで、その下の学年の生徒の学力が今後どのように変化していくのか、おおよその見当が付きまします。そうなれば、学年団における学習指導の方針が立てやすくなると考えました」

更に、スタディーサポートの結果が出る度に、各学年団で検討会を行うことにした。理解不足の生徒が多い分野・単元を把握して学習指導に反映させた他、成績帳票に記載される学力と学習習慣の相関図を、どの生徒についても検討し、気になる生徒には担任が随時声を掛けた。

「検討会を重ねることで、生徒の学力や学習状況についての様々な変化が数値として把握できるようになり、どの先生もしつかり根拠を示しながら生徒と向き合えるようになりました。生徒の様子から『頑張りがなさい』『よくやっているね』と漠然と声を掛けるのではなく、数値に結び付いた具体的なアドバイスが出るようになったと感

図 「スタディレコード」のシート(1年生)

自主学習の内容と時間、その日の自主学習に対する振り返りと自己評価を、生徒が毎日記入する。
*学校資料をそのまま掲載

じます。学習や進路への生徒の意欲を高めた上で、指導することが出来ますし、『生徒に高い目標に挑戦してほしい』という思いを先生方と1つにすることにもつながると期待しました」(加藤先生)

学習の内容と時間を毎日記録させ 自主学習習慣の確立を図る

生徒の実態把握の一環として、「スタディレコード」も行うようになった。これは、生徒が自主学習の内容や時間などをシート(図)に毎日記録する活動で、13年度の1年生が取り組み始めたことがきっかけとなり、次第に他学年にも広がっていった。1・2年生では毎日、担任がシートを回収・集計し、コメントを書いてか

ら生徒に返却する。3年生は自学自習の完成期と位置付けているため、シートを配布はするが、活用は生徒の自主性に任せている。

岩崎先生は、「スタディレコード」の狙いを次のように話す。

「高校での学習内容は、卒業後、どのような進路を選ぶにしても土台になります。更に、学力が高まれば、幅広い選択肢から本当に進みたい道を選ぶようになるでしょう。学習習慣は学力の向上を支える基礎ですから、全ての生徒に1年生のうちにしつかり定着させたいという思いがありました」

1・2年生では、学習時間が長かった生徒を各学年集会で表彰する。取り組みを始めた当初は数人だけだった上位者が、次第に増加していった。きちんと取り組めた生徒を認めてあげたいという思いから、月間学習時間が一定数を超えた全生徒に、賞状を授与する機会を設けた。

「大勢の友人の前で先生に褒められた生徒は、学習に対して更に意欲的になるはずです。友人が努力していることが分かれば、『自分も頑張つて表彰されたい』という気持ちになる生徒も増えるでしょう。本校には、真面目でおとなしく、中学校時代はあまり目立たなかった生徒が多いです。そのため、表彰し、頑張りを認めてあげること、学習への積極性を引き出せるようになるのではないかと考えました」(岩崎先生)

上位集団への働き掛けを通して 学年全体に高い目標を抱かせる

1年生では、成績上位層の生徒の学習意欲を高めることにも力を入れた。その代表的な取り組みが、上位層を対象とする補習だ。国語、数学、英語の補習を週1回1時間、週ごとに教科を変えて全クラスで行っている。この補習に、3教科の総合成績の上位者約30人から成る特別クラス「M課外」を設け、難度の高い問題に取り組ませることにした。「M課外」の受講者は、まず入学試験の成績で選抜し、1学期の中間考査の成績で入れ替えた。

「生徒が高校生活に慣れてくるに従って、学習意欲が低下し、上位層が大きく減ってしまふことが、本校の長年の課題でした。そこで、入学当初から各クラスの成績優秀者を集団化し、切磋琢磨させようとしたのです。上位集団としての一体感が早く生まれるように、『M課外』を受ける生徒の入れ替えは1学期の一度だけに行いました。メンバーを早期に固定すれば成績推移を把握しやすくなるため、『M課外』受講者の成績を、学習指導の成果を測る基準点にでき、上位層を育てる指導に生かせると考えました」(岩崎先生)

更に、以前から数学と英語で行っていた習熟度別授業の仕方にも、工夫を凝らした。例えば数学の上位クラスでは、模試の過去問題をアレ

ンジした独自プリントに毎回取り組ませるようにした。この学年を3年間受け持っている数学科の松尾拓先生は、次のように話す。

「上位クラスの生徒の中にも学力差がありますから、プリントには基礎的な問題から応用問題まで、様々な難易度の問題を載せました。数学が得意な生徒でも達成感が得られるように、背伸びをしようと解ける問題も1〜2問出題するように心掛けています」

また、「M課外」を受講する生徒と、それに続く成績上位の生徒計約60人を対象に「上位者集会」を定期的に行った。ここでは、生徒が自分の学力を広い視野で捉え、進路を検討できるように、模試の平均点などを、茨城県内の進学校2〜3校と比較しながら示した。

「これまで本校の生徒は、『一般入試での大学進学は自分には無理だろう』という消極的な姿勢や、『先輩も専門学校に進学するみたいだから、自分も専門学校にしよう』という安易な姿勢になりがちでした。ただ、近年は学力が向上し、上位層の学力水準は、近隣の上位校と遜色がなくなっています。そこで、上位層の約4分の1の生徒には上位校の成績を伝え、『高い志望を抱き、プライドを持って努力し続けてほしい』と、繰り返し呼び掛けました。上位層の意識が変われば、中・下位層の生徒も刺激を受け、学習にも進路にも前向きになると期待しました」(岩崎先生)

学年間のつながりを深め 取り組みの発展的な継承を目指す

同校の改革初年度に入学した現3年生には、志望進路を問わず、自ら学びに向かう生徒が多く見られるようになった。例えば、生徒は2年生以降に3つの系列に分かれて学ぶことになるが、いずれの系列でも学習時間が長くなった。更に、上位層だけでなく、中・下位層にも、「スタディレコード」で表彰される生徒が目立つようになった。

また、1年生で「M課外」を受講していた生徒は、2年生以降も各系列の学習面でのリーダーとなり、進学希望であれば、国公立大が十分に視野に入るだけの学力を身に付けて、一般人試での合格を目指している。

教師の意識も大きく変わった。改革に着手した3年前には、新しい学習指導や進路指導に必ずしも積極的でない教師がいた。しかし、今ではどの教師も意欲的に取り組んでいると、川村はじめ教頭は話す。

「スタディーサポートなどによって学力推移が客観的に把握できるようになり、生徒がいかに成長しているかが、どの先生も把握できるようになりました。かつての指導のままでは対応できないことを、身をもって感じるようになったからこそ、改革に前向きになれたのだと思います」

若手教師が語る、指導変革への情熱

教師が本気になってこそ 生徒の気持ちに火をつけられる

3学年担任 松尾 拓

私は本校に赴任した当初、担当する数学の授業で、退屈そうにしている上位層の生徒がいることが気になりました。そこで、赴任2年目からは、幅広い難易度の問題に取り組みせたいと、模試の過去問題などを参考に作成したプリントを教材に用いるようになりました。基礎問題の他、既習分野の応用問題などを出題しています。「少し難し過ぎたかな」と私が感じる問題でも、途中までは解ける生徒が珍しくありませんし、見事に正解する生徒もいます。生徒の底力に驚かされることの連続でした。

そのため私は、生徒の学習意欲を更に高めたいと思い、良問をより精選するようになりました。教材の作成に深夜まで取り組むこともありましたが、手間だと感じたことは一度もありません。それは、生徒を本気にさせるには、まず教師の私の本気にならなければならないと、必死だったからです。生徒も私の期待に応えてくれたため、1年生から受け持っている現3年生では、数学の学力を大きく伸ばすことができました。

ただ、志望進路を実現するためには、数学以外の教科もしっかり学習する必要があります。クラス担任としては、生徒に課題のある教科を学習するように促す責任を感じています。生徒一人ひとりの他教科での学習状況をもっと正確に把握できるように、今後は他教科の先生方と今まで以上にコミュニケーションを重ねていきたいと考えています。

現3年生に実りつつある改革の成果を、下の学年で更に進化させていくために、新しい取り組みも始めている。15年度には、全学年の学年主任、進路指導主任、教務主任、生徒指導主任が月1回集まり、それぞれの学年の課題を共有して解決策を話し合うようになった。

「入学してくる生徒は毎年異なりますから、前年度の1年生の取り組みを、今年度の1年生でそのまま行っても、うまくいくとは限りません。どの学年でも、過年度の生徒と比較しながら、目の前の生徒に応じて取り組みを工夫できるように、学年団相互の情報共有を強化しています」(岩崎先生)

16年度からは、生徒の進路意識を更に高める

取り組みにも力を入れる計画だ。例えば、1年生の必修科目「産業社会と人間」では、大学や地域の職場などを見学する際に、事前の目標設定と事後の振り返りを徹底させる。2・3年生では、自分の課題意識に基づいたテーマについての探究学習も始める。

「総合学科である本校では、生徒の志望進路に応じて、多様な分野で専門性の高い知識と技術を育む必要があります。今では多くの生徒が主体的に進路を検討できるようになりましたから、今後は、その選んだ進路で生かせるような専門性を身に付けることへの意識付けを強めていきたいと考えています」(川村教頭)